

集英社新書 ノンフィクション

癒されぬアメリカ

先住民社会を生きる

鎌田 遵

Kamata Jun



目次

はじめに——声なき民族の抵抗

8

第I章 砂漠を生きる知恵

——モハベの哲学

13

- 1 大事なところ
- 2 部族のタブー
- 3 つながる人びと
- 4 迫害される人たち
- 5 帰ってきたモハベ

第II章 フェイクな「アメリカ」

——「移民の国」のつくられ方

69

- 1 真実をもとめて
- 2 フェイク・ニュース

第Ⅲ章

壁とカジノとトランプ

——先住民から見たアメリカ社会——

- 3 いったのか、いわなかったのか
- 4 ワイルドな先祖
- 5 戦場の先住民
- 6 濫用される言葉
- 7 生きるための戦い

- 1 先住民の政治
- 2 ギャンブルと部族社会
- 3 破壊される大地
- 4 抵抗の意思表示
- 5 引き裂かれる民
- 6 去って行く先住民

第Ⅳ章 言葉を守る民

——ストーリーが紡ぐ世界

- 1 長くてつまらない話
- 2 物語とともに生きる
- 3 部族の恩人
- 4 大切な命
- 5 オチはなくても
- 6 部族の流儀

第Ⅴ章 癒されない魂

——イメージと現実のはざままで

- 1 いまこそ先住民
- 2 ヒーラーの想い
- 3 最後の「インディアン」
- 4 ステレオタイプとスポーツ

5 リベラルの憂鬱

6 偏見

7 海を渡った同胞たち

第VI章 天国にちかい部族

——プエブロ族との日々

1 いい奴と過ごした日々

2 スリルをもとめて

3 ひとり去り、またひとり去り

4 ちかくにいる人たち

あとがきにかえて——店番失格

主要参考文献

はじめに——声なき民族の抵抗

「ただ、そこにいるだけ。何も語らず、じつと存在しつづける。それが我々の抵抗だ」

アメリカ先住民（ネイティブ・アメリカンやアメリカン・インディアンなどとも呼ばれるが、以下、先住民）、モハベ族のマイケル・ソーシが、わたしにそういつたのは、彼の先祖の世代は、何か行動を起こせば弾圧され、ときには部族ごと虐殺されるほど過酷な歴史を経てきたからだ。彼は二〇一六年一月、五二歳の若さで心臓疾患によって他界した。

「権力者の暴力に、我々はぜったいに屈しない。その精神は健在だ」

と彼はなんども繰り返かえしていった。

ソーシとは、モハベ族をはじめ、数々の居留地で調査をともしただけでなく、一〇〇〇時間以上にわたって、インタビューをつづけた。それでも、まだまだ話し足りない、もっと伝えなければならぬことがある、といいながら、彼は悔しそうに、この世を去った。彼が伝え、残したい想おもいとは何だったのだろうか。

彼は母方のモハベ族、父方のナバホ族とラグーナ・プエブロ族の文化に精通してただけで

なく、それぞれの部族の言語を流暢に話し、スペイン語にも堪能だった。部族の伝統行事では、つねに大切な役割を任せられていた。さらにハーバード大学で政治学を学び、アメリカ社会でも大学教員として成功するであろうと期待されていた。

モハベ族は、先祖代々、砂漠で生活してきたが、生命線だった川の水は、工場排水によって汚染がすみ、先祖から受け継いだ聖なる砂漠は、射爆場や基地建設などの軍事施設の開発で破壊された。変わり果てた故郷、モハベ族が生きる大地へのソーシの愛惜の感情は誰よりも強かった。しかし、彼らが国や企業を訴える手だてはほとんどなく、ただ時間だけが過ぎていった。そんな惨状に日々接してきたソーシは、会うたびに怒りをあらわにした。

「白人は自分たちがすべての中心であると考え。しかし、先住民の生活の中心には、自然環境への敬意と先祖の魂との深いつながりがある。一部の人間のエゴが差別を助長し、生態系と社会全体を破滅に導いてきた」

それはコロンブスがアメリカ大陸を「発見」して以来、先住民が歩まされた長い苦難の歴史がまだ終わっていないことを意味している。白人による執拗なまでの虐殺行為、伝統や言語を奪い、強制的にアメリカ社会に順応させた、一九世紀以降の同化政策、そして人種差別、迫害はいまもつづいているのだ。

「声をあげることでみずからの存在をアピールすることは大切だ。しかし、何百年ものあいだ

絶滅していくことを期待され、文化や言語、存在そのものまでも否定されてきた民は、ただただ、もがいてきた。そして、いまの時代をなんとか生き抜いて、自分たちに起きている事実を、きちんと把握して、若い世代に伝えていこうと必死だった」

とソーシはつけ加えていった。声を発すれば抹殺されかねなかつた歴史をくぐり抜けてきた民にとっては、生き延びることこそが抵抗であり、つぎの世代へとつなぐ希望だったのだ。

二〇一〇年の国勢調査によれば、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）には、およそ二九三万人の先住民（先住民以外の人種アイデンティティも有していると答えた人の合計は五二万人以上）が生活している。それはアメリカの総人口約三億八七〇万人のおよそ〇・九%を占めているにすぎないが、二〇一九年現在、連邦インディアン局のホームページによると、連邦政府から承認を受けた部族数は五七三にもものぼる（承認を受けていない部族も数多くある）。

二〇一一年の国勢調査局の発表では、先住民が守り抜いた土地でもある居留地の数は、三三四。居留地に住んでいる先住民の割合は、全体のおよそ二二%と少ない。

なかには資源開発で潤い、部族警察署、部族消防署、部族裁判所、小・中・高・短大まで完備する人口一〇万人を擁する大規模な居留地もある。その逆に、人口数十人規模の居留地もあり、先住民社会は一様ではない。

たいがいの居留地には、部族をまとめ、州政府や連邦政府との交渉を担う部族政府が設置さ

れている。さながら独立国家のようだ。

また、国勢調査局の二〇一五年の発表によると、先住民の平均年齢は三一・四歳で全米平均の三七・七歳よりも若いことが示されている。しかし、二五歳以上の人で四年制大学を卒業しているのは一八・五%、全米平均の三〇・一%をはるかに下回り、貧困率は二八・三%（全米平均は一五・五%）で、ほかのどの人種よりも深刻だ。

先住民研究をはじめて、およそ三〇年になる。わたしがこれまでに訪れた居留地は一〇〇を越える。広大な国土を有するアメリカの全土に点在する、先住民の生活空間は実に多様だ。

先住民とひとくちにいつても、海沿いの集落で漁をする部族、川沿いで農耕する部族、大平原の狩猟で生活する部族、砂漠で野草や果実を採集する部族など、多様な生活を築き上げ、持続してきた。それぞれの部族にそれぞれ固有の歴史と伝統文化がある。

アメリカは、西部劇や歴史の教科書で、いつも開拓者の偉業ばかりが賞賛され、「移民の国」のイメージが一般的だが、たくさんの部族を内包する「先住民の国」でもある。

本書は、わたしが先住民社会のなかで経験し、学んだことを通して、現在のアメリカ社会を読み解くことに主眼をおいた。先住民の人たちが発した言葉から、歴史や現状が伝わることを願っている。

